

浄土

1993-2

昭和十一年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回 日発行
昭和十四年四月二十八日（漢字省特別換承認書） 第 五 号
平成五年一月十五日印刷 日発行
第五十九卷

一月号



河内の邪鬼

心持





二月の秀句

早春の山笹にある日の粗らさ

春浅し白兎地をとぶ夢の中

春めきし笹の先を土ころげ

細見綾子

飯田龍太

星野立子

||| 二 月 号 |||



一念なをむまる、いかにいはんや
多念をや。

『つねに仰せられける御詞』

目 次

④ 法 話

善き師とのめぐり合い (2) 八 木 季 生 (2)

《涅槃会法話》

釈尊最後の言葉 原 口 正 弘 (9)

西 年 史 談 細 田 豊 明 (16)

“維持会員” へのご加入のお願い (8)

季語やぶにらみ (31)

..... 木 下 隆 一 (26)

壬申の年逝く (2)

表紙絵 小林治郎画

法

話

善き師とのめぐり合い (2)



八や木ぎ季き生しょう

(東京・文京区一行院住職)

人生は人とのさまざまな出会いが、恰も七色に変化する噴水にも似て、或る時は小さく変化し、激しい吹出し、穏やかな収束、そんな動きに悲喜こもごもの色合いを見せながら展開していくように思われる。

特に善き師、善き指導者とのめぐり合いは、その人の幸・不幸、人生そのものを左右する大事なキイ・ポイントにもなる。

私には、林 隆碩師と藤井実応猊下の他に、もう一人の布教上の感化を受けた善き師が

あつた。山口県大島の西蓮寺におられ、光明会の上首であつた藤本浄本勸学である。

昭和の三十年代のことであるが、藤本上人を導師として、長野県松本市の郊外にある鉢伏山で、親子別時という光明会の別時念仏会のお手伝いをするようになって、毎年七月の末頃に五・六日の間であるが、山荘で一緒に過ごしたご縁からのことである。

鉢伏山は、塩尻峠から北に直線距離で7キロほど行ったところに位置する1998メートルのお椀を伏せたような丘陵状の山で、松本の篤信者、多田助一郎氏がこの山の美しさに惚れ込んで、道路をつくり自費で山小屋を建て、念仏道場「紫山荘」を建立したものである。

六月になると蓮華つつじが鮮やかな緋色の花をつける。風の強い山に自生している木だから地面を這うような格好で枝が伸びて、その枝に花が着くから、あたかも一面が花だらけになる。

夏になると、日光きすが山全体を覆う時期がある。その年の気候によって一定していないが、七月末から八月初旬である。

またこの時期は、高山植物が咲き乱れる花の宝庫で、大げさな言い方かもしれないが、大自然の横溢したこの世界の別天地である。

夜はランプだった山荘に、椎尾弁匡法主が共生会の結集をここで開かれるようになって

から発電機を寄贈され、夕方から十時ころまで電気が点くようになった。

夜空の満天の星は降るかの如く、手のとどくようにそこに在り、深夜は全くの無音の状態になるから、逆に耳が痛い程静寂である。

午前四時四十分過ぎのご来迎は条件さえよければこれがまた素晴らしい。薄い墨を流したような雲海から、真つ赤は太陽が昇る様は、太陽が生きているかと思う。

ここで藤本浄本師の行われた親子別時とは、お母さんが子供を連れて別時念仏会に参加するのである。

せっかく娘時代に仏縁を頂いても、結婚して子供ができると子育てに追われ、普通には子供連れで別時会に参加はできないから、一時期ブランクが生じる。

大切な仏縁に空白が生じてはいけないから、若いお母さんが子供を連れて別時念仏に参加し、子供は保母さんが預って大自然の中で法身如来のお育てをいただき、親は子育てから解放されて、法話に念仏に、報身如来のお育てをいただくという趣旨のもとに行われるようになったものである。

この山で十数年、毎年一回一日数時間ずつ五日間くらい拝聴した法話は、今も私の脳裡に残っている。

この山莊が火事で全焼し、親子別時も一時途絶えたが、山莊が復活してから、先にも紹



介した光明会婦人部長だった足利千枝女史が親子別時を再開した。

しかし、この時は藤本浄本師は遷化されていたので、爾来私が引き継いで日数こそ二泊三日と短くなったが現在も続いて行われている。

何人の少年少女が鉢伏山の大自然にふれ、若いお母さんが念仏に結縁したことか、現在は二世の時代で、子供で参加した人がお母さんになって子供を連れて参加し、子供で参加した人が子供の面倒を見てくれている。

藤本浄本師の法話は、私が初めて接した時に既に八十才を大分過ぎておられたせいもあるが、物静かな話しかたで、上手に道詠を挿入しながら如来の慈悲を説くという感じであつた。

その態度は懇懇丁寧で、微塵も高ぶる様子がない。大正大学の先生をしていた時に図書館の図書の整理をさせられた。その時沢山の本を読んだが、それが私の知識を支え、山崎辨栄上人との出会いが、私の信仰の中味であると言っておられた。

私はこのようにして三人の師に出会い、林隆碩師に布教の何たるかを教わり、藤井実応師に布教の心を習い、藤本浄本師に布教の深味を会得した。

そして得た結論は、「仏意に随順することは、発願すれば不可能はない」という信である。こうした、これをしなければならぬという事態に直面した時、それが如来さまのみ心

に叶うことであれば、願いを起こして行動に移れば、その願いは成就するということである。なぜなら、仏意に随順することが、真の仏弟子なるが故、みほとけの加護が得られるからである。

私は五重相伝の勸誡をさせていただくことがあるが、冒頭に導師の觀經疏散善義の中から、次の部分を拝読してから、勸誡に入ることになっている。

『仰ぎ願わくは一切の行者等、一心にただ仏語を信じて、身命を顧みず、決定して依行せよ。仏の捨てしめたまう者をばすなわち捨て、仏の行ぜしめたまう者をばすなわち行じ、仏の去らしめたまう処をはすなわち去れ。これを仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、これを仏願に随順すと名づけ、これを真の仏弟子と名づく』

の部分である。

仏教者はすべからく仏弟子でなければならない。何を以て仏弟子とするかと言えば、仏意に随順する者を以て仏弟子とする。実に簡明な表現である。

五重相伝は、仏弟子を育てることを目的とするものであるから、最後の結論を先に述べておくのである。なぜそうするのか、それはただ恩師、林 隆碩師が、そうしていたという理由だけからであるが、善師にあえて指導を得たからこそ、究極の何物かを掴み得たのであって、善き師との出会いに深く感謝している。

◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十九巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一歩一歩前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

《涅槃会法話》

釈尊最後の言葉



原^{はら}口^{ぐち}正^{しょう}弘^{こう}

ラジオからある便り（女性からの）が聞こえてくる――。

私はあるアパートに住んでいます。夕食を済ませてお茶を飲んでいた時のことです。隣の部屋から洩れ聞こえてくる会話。「あなたが好き、あなたとなら死んでもいい……」しばらく続く女性の愛の告白、それも大きな声で……。はて隣の部屋の住人は一人だけ。たはずでは……。

数日後その訳がわかりました。彼女が劇団員だったのです。私もそういえば二十年前、劇団にいたことがあります。以来、壁ごしに時折聞こえるコトバに彼女を応援したくなりました。

なにかのきっかけで人はふれあいを感じとることがあります。それがたとえ直接会っていないともです。すばらしい縁は私たちのまわりにいくつもつくられています。その人にふれたこと（出会ったこと）がその時代を生きた人々の喜びとなるような、そういう人に自分自身になることが出来たなら、どんなにかすばらしいことでしょう。

京都梅尾に明恵上人というお方がいました。彼は釈尊に対する追慕の念あつく、釈尊を讃仰し、涅槃会の功德を述べた四座講式をお作りになり、涅槃会を行っています。明恵上人は自らインド巡礼を試みようとしたが、実現出来ず、紀州の砂を手に取り、この砂はるかインドまで通じているのだとの熱き想いを駆せたといっています。

『本行集経』に釈尊の出家の動機を伝えた「四門出遊」のお話があります。釈尊がまだ若かった頃、カピラ城の東門で老人を見ます。最後に北門より沙門を御覧になって、このことが出家の動機になりました。現代では複雑な社会情勢によって、四門出遊どこ

ろではありません。五門、六門いや十門あるいは百門と門が分かれるかも知れません。空飛ぶ鳥、土這う虫、樹齡千年といわれる松、そして私もあなたも最後には老い、死んでゆきます。人は若いときは美しく、そして力のみなぎっている青春（とき）があります。しかし残念なことですが、若きを誇ることは出来てもその若さをいつまでも保つことは出来ません。

やがで死すべき身の、いま命あるはありがたし（『法句經』）

あとわずかな命と宣告された末期患者、死に至る病を自らかかえている人、その人たちが、死ぬまで精一杯生きよう、とおっしゃっていたのには心打たれます。

釈尊が受け止められた苦悩はすべての人に共通のものでした。それら苦悩をすべて克服し、お悟りを開かれた釈尊ではありませんが、晩年は穏やかな伝道の旅では決してありませんでした。愛弟子であった舍利弗、目連はともに師に先立って逝ってしまわれ、悲しみとそして老齡による肉体的苦痛の連続でした。それでも続けられた伝道の旅は真理の法を伝え残しゆくことにありました。

さて話しは今から二千五百年前にさかのぼります。

釈尊は三十五歳にしてお悟りをひらかれ、八十歳の生涯をクシナガラで終えるまで、インド各地を裸足で、四十五年ものあいだ伝道の旅を続けられました。雨の日も風の日も、インドの国々をめぐる、熱心に教えをひろめられました。インドは広大な国土である上に暑さは厳しく、人々は貪しく生活をしていますが、おそらく釈尊当時もいまとあまり変わりなく人々は生活を送っていたことでしょう。釈尊の最後の伝道の旅はアンバラテイカーからナーランダへと、そしてバトナムという町を通り、ガンジス河を渡ってヴァイサリという村へと続きます。何度となくこれまで伝道に往来したヴァイサリの町も釈尊がそこを去るとき、ゆっくりと振り返って「アーナンダよ、わたしがヴァイサリの町を眺めるのもこれが最後になるであろう」とおっしゃったといえます。そして「さあ、クシナガラへ行こう」と壊色に衣を身にまとい、釈尊は涅槃の地クシナガラへと向かわれました。

クシナガラから数キロ近くに故郷のカピラバスツがあることから、きっと釈尊は懐かしい故郷を今一度訪れたいと願われたのでしょう。

釈尊の入滅は帰依者チュンダが料理人に命じて作らせたきのこ料理によってその死を早めたとされています。折角のチュンダのおもてなしも釈尊の既に衰えた体には、料理

が毒性のものであったのか、彼にいつその衰弱と下痢による苦痛をもたらしました。しかしながら釈尊は「チუნダよ、私はこれまでに二つの大きな供養をうけた。ひとつはスジャータの乳がゆの供養であり、もうひとつはあなたの供養である。娘スジャータの供養は厳しい修行の果てに差し出してくれた悟りへの道への供養であった。そしてチユンダよ。あなたの供養は私の説いてきた生者必滅の道理を身をもって知らせる入滅の機縁となった。私はこの身を滅ぼすが、私の教えを決して害するものではない。気にしないでおくれ」とお述べになりました。そして釈尊はその衰弱した体で、幾度も休みながら、臨終の地と定めたクシナガラへ向かったのです。

クシナガラでいよいよ涅槃にお入りになるときがやってまいりました。釈尊の亡くなるとき様子はといいますと、頭（こうべ）を遠く北に聳えたつヒマラヤに向けられ、また釈尊ご自身が出家されるまえの懐しい故郷、カピラバスツにその頭を向けられたかっこうで沙羅の木々の間に横になられ、右脇を下にしてお休みになりました。そして嘆き悲しむ弟子たちに向かってこうおっしゃいました。「阿難よ、私はもう法のすべてを説き尽くした。今の私はあたかも、古い車が修理しながらやと動いているにひとしい」「諸行は壊法なるものである故、不放逸にして精進するように」と。そのとき釈尊のまわりには、象、獅子、孔雀、牛、馬など鳥や獣たちまでが集まって、涙を流した伝えら

れています。阿難、迦旃延、富楼那等の十大弟子、文殊・普賢・地藏の諸菩薩羅漢たちは釈尊の入涅槃を静かにみつめ、名医耆婆も非力を詫びて彼の非情の運命に堪えているかのように、すべてが涅槃に入る釈尊を静かにみつめていました。そして万物は流転し、諸行は無常なりの理を今更の如く知らされると、集まったものはみな大声を上げて号泣したといひます。

二月十五日は釈尊が亡くなられた涅槃会の日です。最後の言葉は「自らをとしびとせよ(自灯明)、法をともしびせよ(法灯明)」でした。自己の本当の命に生きよ、生きるものは自分自身であり、生かしてくれるものは法である。という言葉をとのこして……。そして最後には軀が動かなくなるように、静かに息を引き取られてこの世の無常をお示し下さいました。

「涅槃」ニルバーナとは、「燃えさかる煩惱の火を消しつくして、悟りの智慧をうち開く世界」をいいます。

釈尊には二度の涅槃がありました。三十五歳の時、ブッダガヤでお悟りを開かれたときが有余涅槃と呼ばれるもの、そしてこのクシナガラにおける入滅のときが無余涅槃と呼ばれるものであります。八十歳で入滅された釈尊はまさに余すところのない完全燃焼のすがたで涅槃に入られました。

私たちの周囲では移り変わらないものを見ることはありません。その中であって何事もわかつていながら何も実行しないのは、私たちが怠情な心をもつことにほかなりません。ゆえに怠ることなく精進努力して修行に励みなさい。そして務め励む努力をすることによって怠けごろを払拭しなさい。そう教えられたのでした。人間というものはとかく快樂にはしりがちです。なすべきことをしないでいると、「小人閑居して不善をなす」の言葉が示すように、いつの間にか道を外しています。

若い男女が「お互いの愛を永遠に誓った」など言っても残念ながら愛も変わってまいります。すべてが一瞬の休みもなく移りかわってゆくのです。諸行無常ということですから愛する者と別れなければならないことも、生ある者は必ず死体なければならないことも逃れたい道理です。ですから、人は生きてゆく限りこの事実に立ち向かって、執著からはなれて怠ることのない精進努力をしていかなければなりません。

厳寒に凍る間もなし水車かな

四季のある日本はいま厳寒の真只中にあります。流れゆく川にあってぐるぐると回り続ける水車は、釈尊のお説きになった精進の力をあらわしているような気がします。

酉年史談



細田豊明

平成五年は干支がかんし癸酉みずのととりであるので酉年と

いう。酉は十二支の動物に配すると鶏である。

酉の象形文字は酒瓶の形からできた。もろこし黍が

みのつて酒を作ることから、成就の意味があ

る。酉年は繁栄の年であり、万事が成就する

年でありたい。

酉は時間の上から午後五時から七時までの

二時間、または午後六時をいう。方角では真

西をいい、季節では旧暦の八月をいう。本年

西歴一九九三年、昭和以来六八年、大正以来

八十二年、明治以来一二六年である。

鶏は全世界で飼育されている家禽にしてほかに例をみない。鶏は四千年前インドにおいて野鶏が稲作民族によって家畜化され、各地に広まった。古代エジプト（紀元前十五世紀）には鶏が飼育されており、古代ペルシヤも飼育されてきた。紀元前七世紀ごろにシリア、ヨルダンにも飼育されたが、古代セム系人は鶏を飼育しなかった。旧約聖書には鶏の話は一つもない。しかし新約聖書には一つある。マタイによる福音書第二十六章に彼（ペテロ）は「その人（キリスト）のことは何も知らない」といって、激しく誓いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。ペトロは「鶏が鳴く前に、三度わたし（キリスト）を知らないと言うであらう」と言われたイエスの言葉を思い出し、

外に出て激しく泣いたとある。

日本には古墳に鶏の埴輪があるから鶏は早くから中国、朝鮮を経て伝わっていた。古事記上卷天の石屋戸のこもりの段に、天照大神が天の岩戸の入り給いしとき神々が集まり、「常世の長鳴鳥を集めて鳴かした」とあり、長鳴鳥は鶏のことである。同じく同書の沼河比売への求婚の段に「庭つ鳥、鶏は鳴く」とあるが、庭つ鳥は鶏の枕詞、「かけ」は鶏の古名である。

鶏は和名抄にに爾波止利と訓じ、古来ゆふつけどり、庭つどり、八こえのとり、ながきどり、くだかけ、かけろ、かけの別名がある。

鶏を詠んだ歌は万葉集に二首あるが、いずれも読み人知らずである。

たが褌みそぎ木綿ゆふつけ鳥からこもか唐衣からこもたつ田の山

にをりはへて鳴く(万葉集第十八雜歌下)

唐衣は「たつ」の枕詞、たつ田は「龍田神社」、をりはへては長くの意、龍田神社(奈良生駒山)でみそぎをする人が放った鶏が龍

田の山で長々といひ声で鳴いてゐる歌である。

庭つ鳥かけ鶏の垂たり尾の乱れ尾の長き心も思

ほえぬかも(万葉集卷七挽歌)

庭つ鳥は「かけ」の枕詞、長き心はのんびりした氣持、鶏の尾のようにのんびりした氣持では居られない、愛する人に死なれた者の悲しみにとつてはの意味である。

古今集に鶏の歌二首、時の権力者藤原不比等が万葉の大歌人大伴家持を招いたときの一首である。

打ち羽振はふき鶏は鳴くともかくばかり降り

敷く雪に君いさめかも(古今集第十九)

羽ばたいて鶏は夜明けを告げていても、これほど降り積った雪では帰れないからゆくりしてゆき給への意味である。

鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重ちよに積みこそ我が立ちかてね(古今集同)

いやしき鳴くはしきりに鳴く意、千重にはたくさんに、積みこそは積もればこそ、かてねのねは打ち消しの意。鶏が夜明けを告げてしきりに鳴いているが、降る雪がたくさん積っているのわたしは帰れないのだの意味である。不比等の前首の歌に答えて家持が詠じた歌である。

鶏は悪靈を追放する太陽神と結びつく靈鳥とされて、伊勢神宮の神使をはじめ、各地の神社に放し飼いされてきた。とくに白鶏は祭

—— 群鶏 (若冲画) ——



祀用として珍重された。源平盛衰記に七条修理大夫信隆は白鷄数十羽を飼ひ、その娘の生んだ王子が後鳥羽天皇（一一八〇—一二三九）になられたという。天皇は新古今和歌集を撰集された。

江戸時代盛んになった庚申待供養の石塔の青面金剛像の下に雌雄の鶏が刻られたものがある。これは鶏が青面金剛の使者とされたからである。また江戸時代から台所かまどの神として三宝荒神に鶏の絵馬を奉ずることが行われた。これは荒神は鶏を好むといわれ、防火、子供の夜泣き、百日咳に効果があるとされたからである。同じようにかまどの神、土公神も鶏が好きで、防火の神、田の神として信じられてきた。

日本書紀に鶏を戦わせて優劣を競ったこと

があるが、闘鶏は古くから行なわれていた。

中国の影響を受けたものであるが、宮中や武家において毎月三月三日に鳥合せの式、闘鶏を行事としたのである。江戸時代、賭博性がさかんになりしばしば禁止された。とくに闘鶏には軍鶏が飼育されるようになった。

和歌山県田辺市に闘鶏神社がある。当社は新熊野権現または鶏合権現といわれ、平家物語に熊野別当湛増が源頼朝拳兵のとき白と赤との鶏を戦わしたが白が勝ったので、源氏につき屋島の戦い壇の浦の戦いに水軍をひきいて大活躍したのである。

岩手県平泉に金鶏山がある。これは藤原秀衡が金鶏一對を鑄て鬼門の方に埋めて繁栄を祈ったといわれ、各地に金鶏塚がある。元旦に金鶏が鳴くと伝えられてきた。鶏の姿の美

鷗大咽神奈

本年土月間の月
持りすきよの
ふしとてついで
近々の農氏を鑑と
試と宗持との後
悉く後草を視す
の堂系より故と
重例と



——大島神社・鶏納め〈東京・足立区、酉の市の起こり
で、この老鶏を台東区の浅草寺へ収める〉

(『江戸名所図会』より)——

しいものは高知県の長尾鶏ながせどりである。天保のころ（一八三〇）から飼育がさかんになり、尾の長さ八メートルに達し、昭和二十七年特別天然記念物に指定されたものである。

昔、時計のない時代に、鶏鳴によつて時を知ることができ、とくに元旦の朝の鶏鳴を初はつ鶏とりといつて目出度いものとされ、かつ俳句の季題ともなった。

初鶏の人起き出でて煙かな

花笠

初鶏や隣の鶏もうたひけり

鬼史

十一月の酉の日に各地の大鳥（鷺）神社で祭礼があり酉の市が立った。一の酉、二の酉がたち、年によつては三の酉が立つこともある。昔、足立区花畑町の大鳥神社の祭礼の十一月酉の日に近在の人が老鶏を奉納し、神社では翌日これを納め鶏と称し、浅草の浅草寺

に納めた。この祭礼に農具をはじめ熊手などがよく売れた。熊手は金銀を集める縁起ものとしてよく売れたのである。

花の木に鶏寝るや浅草寺

一茶

浅草の酉の市は江戸時代から賑わいをみせた。

酉の日は息子持病が又おこり（古川柳）
息子の吉原通いの持病を川柳にしたものがある。

叱られる側にしなびたとうの芋（古川柳）
吉原からの朝帰り、亭主が女房に叱られたことを川柳にしたものである。

鶏は古来太陽を迎える光りの霊鳥とされてきた。その鳴声が闇の悪霊を払うものとされた。後世、屋根の上の風見鶏は災害を防ぎ天気を予報する鶏であるとして飾られた。中国

の陰陽五行説も鶏は邪氣を払うものとされてきた。隋唐の医書を研究して丹波康頼が永観二年（九八四）刊行したわが最古の医書、医心方によると三歳の雄の白鶏のけづめを焼いて女性に飲ませることが止淫術とされ、女性を求める男性には雄鶏の羽毛を焼きその灰を酒に入れて服用すると目的が達せられるとある。同書には鶏肉、鶏卵などの医療方法が記載されている。

古代インドでは鶏のみならず鳥が靈鳥とされ、仏教の中にとり入れられている。仏本生經に釈尊が野鶏となって森の中で慈心を行ぜられたとき、野猫が樹上の野鶏王をみて甘言で誘惑し捕らえようとしたが、野鶏これに応ぜず猫の害を免れた話がある。薬師如来の侍者十二神将の中の波夷羅大将は酉の神と称せ

られ頭上に鶏を載せている。直接鶏に係る話ではないが仏教の中の話をつぎに掲げることとする。

◎寒苦鳥かんくちよう

ヒマラヤに棲むという鳥、巢を作らないから夜になると寒くて耐えられないほどの苦しみをする。そこで明日こそは巢を作ろうと鳴くのであるが、朝になって日が照り暖かくなると夜の厳しい寒さのことを忘れてしまう。その上、どうせ無常のこの世のこと巢などいらないと諦めてしまう。これを繰り返しながら一生を終えた鳥である。

◎迦陵頻伽かりようびんが

極楽浄土に棲む美声音の靈鳥、その声を聞いて救われるという。華鬘をはじめ音楽に係りのあるものに使用されている。

◎迦楼羅天^{かるらてん}

インド神話上の巨鳥、鳥類の王で母が蛇（竜）族の奴隸となったことを怒り、報復のため毒蛇を常食とする。金翅鳥^{こんじちよう}と訳す。天竜八部衆の一つとされ、天狗の原型であるといわれる。

◎孔雀明王^{くじやくみやうおう}

毒蛇を食う孔雀を神格化し、蛇の毒をはじめ、一切の害毒、災害を滅して人々に安楽をもたらすという。明王は孔雀に座している。

◎鳩摩羅天^{くまらてん}

鳩摩羅は王子童子の意味。孔雀に乗っている姿である。神名としてシバ神（大自在天）の息子をいい、別名を韋駄天^{いだてん}という。駿足にして仏教護持する仏天である。孔雀を配する仏天が多いのは、孔雀が毒蛇を制し、諸人を

守護する意味からである。

◎那羅延天^{ならえんてん}

剛力な仏天であって剛鳥である迦楼羅鳥^{かるら}に坐して、寺門を守る仁王の右側の金剛というのであるが、阿弥陀仏の本願の一つに那羅延天のような金剛身をえたいとある。

◎鳳凰^{ほうおう}

中国古来伝説の瑞鳥で、鳳が雄、凰が雌である。奈良朝時代から鳳凰は多種多様な形で染織品、鏡、漆工品、仏具などに使用されている。法隆寺金堂西の間の天蓋の鳳凰は優雅であり、藤原時代の平等院の鳳凰堂の棟の両端には高さ一メートルの美しい銅製鳳凰があげられている。祭礼神輿の頂上に鳳凰は飾られている。

◎梵天と月天^{ぼんてんがってん}

梵天と月天は鷺鳥に乗っている。梵天は天界を守護する仏天、月天は十二天の一つ月を神とした仏天である。

江戸時代、伊藤若冲（じやうちゆう）（寛政十二年（一八〇〇）没）は狩野派や光琳派を学び中国の古画をよくし、とくに鶏の画だけを追求し、鶏の画においては古今東西最高と称せられた。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

（申し込み先）〒一〇二 東京都千代田区飯田橋二一一六

法然上人鑽仰会 振替（東京）八八二一八七

○お詫びと訂正

『浄土』正月号の年賀広告欄の裏辻賢洲上人はおなくなりになりました。編集印刷の誤りで掲載してしまい、故上人及び大善寺様に大変なご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。

壬申の年逝く(2)

先月号の原稿の写しを読み返して、六〇年に一度やってくる壬申の年をカバーしたに過ぎないから、短絡の誇りは免れないが、少なくとも一二年頃までは、時は緩やかに流れていたのだと思う。実際には戦あり、天変地異あり、飢饉あり、流行病の蔓延ありで、

木きの

下した

隆りゅう

(随筆家) 一いち

その時その時の人々にとっては決して暮らしやすい年でもなかったはずだが、例えば「壬申の乱」などは戦の悲惨さは消え、単なる歴史の一齣として、私にはすでに悠久のロマンとしか感じられないものになってしまっている。そして、この前年に中国から漏刻(水時計)

が伝来したとはいえ、庶民には関わりなく、ストレスも溜らなかつただろうなと思つたりもする。一日の時の刻みよりも、半年単位、一年単位で、農作物の出来具合や魚の回遊状況などに一喜一憂していれば事足りたであらう農民や漁民の暮らしを、かつて二〇年間放送会社の制作部に勤務して、秒魔に冒され身も心もボロボロになつてしまつた我が身を顧みて、つくづくとうらやましく感じるのである。

遺された情報量が少なく、またその殆どが上流階級に関する情報に片寄つていて、庶民の暮らしぶりが見えてこないのがもどかしいが、それにも拘わらず、どうしても時は緩やかに流れていたんだなと思つてしまうのである。でなければ、紀友則のような下級官吏に、

「久方の光のどけき春の日に静ころなく花の散るらむ」といった和歌が詠める訳はないのである。

閑話休題。話をそろそろ年表に戻そう。

一二七二年、第九〇代龜山天皇の文永九年五月、高麗の使者、元の入貢をうながす牒状を持ち來たるも、時の幕府の執権北条時宗に峻拒さる。

〈注、当時高麗は元の占領下にあり、すでに国の形態を失つていた。徴兵、重税、苛酷な労働を課せられ、人民は塗炭の苦しみに喘いでいた。この時に限らず、元の使者は一二六六年（文永三年）頃から毎年のようにやつて來ていた。入貢をうながす書面も次第に露骨になり、この時の牒状には入寇を示唆する言辞が書れていたのかも知れない。それを断

固拒否したのは、高麗人から高麗の現状をつぶさに聞けば、日本を元の暴政に曝すことは出来ぬと思うのは為政者として当然のことであり、迎え討つ腹を括ったとみるのが妥当な線であろう。しかし、何しろ他国と正面切つて干戈を交えるのは、六六三年百済救援の兵を半島に進めて以来のことではあるし、朝廷の意見は元の要請を受諾する方向に傾いていたから、この時宗の決断は、言ってみれば伸るか反るかの大博打であつたのである。

元と高麗の第一次連合軍が、壱岐・対馬を侵して筑前に迫つたのはこの年から二年後の文永十一年のことであつた。第二次攻撃軍は更にそれから七年後の弘安四年、第一次攻撃軍とは同じルートをたどつて博多湾に侵入してきたが、二度とも偶然に起こつた台風を

遭つて、殆ど全艦隊を喪失して敗退した。いわゆる文永・弘安の役である。第一次敗退から第二次攻撃を仕掛けるまでに七年を要したのは、文永の役で高麗の水軍を失つた結果であらう。

防衛軍の奮戦もさることながら、二度の台風が日本を救つたことは否めない。いつの頃からか、この台風を「神風」と呼び、困つた時の神風頼みの風潮を生んだが、これは一九四五年（昭和二〇年）まで続いた。しかし、三度目の神風は吹かず、海軍の特別攻撃隊にその名を冠し、あたかも有為の若者を死に追ひやつたにとどまつた。

なお、この前年の文永六年には、幕府のお膝元鎌倉で、既成宗教を誹謗して辻説法を展開する日蓮を、庶民を煽動する者として捕ら

え、竜の口において断罪せんとするも果たせず、佐渡へ遠流している。このことから、再三の元の使者の来日に民心は動揺し、よって生じる流言蜚語対策に、幕府が苦慮していたことがうかがえる。

一三三二年、第九六代後醍醐天皇の元弘二年二月、幕府は討幕を企てた天皇を隠岐に、尊良親王を土佐に、尊澄法親王（宗良親王）を讃岐に遠流。この事件は一応の結着を看たが、一月、尊雲法親王は還俗し、護良と改名して吉野で挙兵。楠木正成もこれに呼応して赤坂千早城に拠る。

〔注〕後醍醐天皇は一三一八年花園天皇を継いで即位。一三三二年、後宇多上皇が自ら院政を廃したので親政を行い、鎌倉幕府の信望失墜に乗じて、事ある毎にこれを覆滅し政

権を王朝に復そうと試みたが、その都度側近の裏切などに遭って果せず、三種神器を奉じて笠置山に入り、挙兵するも衆寡敵せず、執権北条高時によって隠岐に配流された。高時は、第九三代後伏見天皇（持明院統）の第一皇子を擁立して光厳天皇とし、元号も正慶と改元した。いわゆる南北時代の始まりである。

なお、ここで持明院統と大覚寺統について言及しておかないと、朝廷が二つに割れた説明がつかないので触れておくと、話は第八八代後嵯峨天皇の時代にまでさかのぼる。後嵯峨天皇は在位四年で一二四六年皇子（後深草天皇）に譲位したが、皇弟恒久親王（龜山天皇）をより愛していたので、一二五九年強引に譲位させた。恐らく初めの取り決めでは交互に天皇を冊立するはずであったが、後深草天

皇に皇子がいたにも拘わらず、亀山天皇は皇子世仁親王（後宇多天皇）に譲位したため、後に持明院統（後深草天皇の血統。後深草天皇が退位後、京都持明院を御所としたのでこの名起こる）と、大覚統（亀山天皇の血統。後に後宇多上皇が洛西の大覚寺を仙洞としたところから、この名生ず）の確執を招く原因となった。

これを表にしてみると、次のようになる。

93	92	91	90	89	代
後伏見	伏見	後宇多	亀山	後深草	天皇名
1298	1288	1274	1259	1246	即位年
持	持	大	大	持	系統

96	95	94
後醍醐	花園	後二条
1318	1308	1301
大	持	大

持明院統
大覚寺統

伏見天皇・後伏見天皇と、持明院統が続くのは、その前に二代続いた大覚寺統への報復だったのであるが、後宇多上皇が幕府にクレームをつけて、後伏見天皇は僅か二年四月で退位させられている。幕府の許可なくしては、天皇の冊立すら朝廷の意のままにはならなかったようだ。大覚寺統二代目の当事者であった後宇多天皇が、クレームをつけたというのも奇妙な話だが、自統の権利を守るためには形振りかまわぬところがあつたのかも知れない。後伏見天皇の第一皇子は後に後醍醐天皇の皇太子となり、順調にいけば第九七

代の天皇になるはずであったが、後醍醐天皇が笠置に逃れた後、執権の北条高時に擁立されて、北朝の第一代光厳天皇こうごんとなった。それ以後、北朝は持明院統の光明・崇光・後光厳・後円融・後小松と続き、南朝は後村上・長慶・後龜山と大覚寺統の天皇が継承することとなる。

この一三三二年の壬申の年の前後で特筆すべきことと言えば、前年に吉田兼好の「徒然草」が成ったことと、翌一三三三年五月、新田義貞等によつて鎌倉は攻略され、二二日、北条高時以下一族郎党が東勝寺で自刃したことが挙げられる。源頼朝が將軍職に就いてから約二四〇年間続いた鎌倉幕府の命運は、遂に尽きたのであった。

一三九二年、南朝第九九代後龜山天皇の元

中九年、北朝第六代後小松天皇の明德三年閏一〇月、室町幕府第三代將軍足利義満の仲介で、後龜山天皇は吉野から京都に還幸、三種の神器を後小松天皇に譲り、ここに南北朝統一成る。

〔注〕持明院統の朝廷の唯一の弱味は、正統のシンボルである三種神器を持たないことであつた。南北朝に分かれて争うこと六〇年、南朝では四代、北朝では六代の天皇が立ち、それを守護する將兵も亦、孫子の代になつており、お互いに争うことに意義を見出せなくなつていた。六〇年の歳月は怨讐を彼方へ押しやり、人々の心を捉えていたのは空しさだけだったかも知れない。北朝を立てた鎌倉幕府は滅び、後を受けた室町幕府もすでに三代目となつていた。「そろそろ朝廷を一つにま

とめるか、そんな腹づもりが幕府の中枢に芽生えたとしても、何ら不思議はない。幕府はチャンスを巧みに捉えたといえるし、勢力の衰微していた南朝方にとっては、渡りに船の話であつたに違いない。何度か交渉を繰り返した末、後龜山天皇は神器を後小松天皇に譲り、太上天皇の尊号を貰つて大覚寺に隠棲した。名目だけの上皇であつた。こうして後小松天皇は北朝の第六代から晴れて第一〇〇代の皇位に就いた訳であるが、この讓位は条件の一つに、持明院統と大覚寺統が交互に継承するという従来の姿、いわゆる両統迭立が改めて確認され実現したのであるが、これは実行されず、その後現在に至るまで、大覚寺統からは一人の天皇も出ていない。

讓位に関する条件はこの他にも幾つかあつ

て、いずれも大覚寺統に有利なものだつたらしいが、結果的には何一つ実行されなかった。不世話な推測をすれば、三種の神器を取り上げる一種の詐術ではなかったか。そう受け取られても仕様のない対応を、幕府はしているのである。大覚寺統はこの時点で、完全に抹殺されてしまったと言つていいだろう。

私が南北朝時代について教育を受けたのは昭和一七年国民学校五年生の時であつた。南北朝及びそれに属する武士団は善玉、後醍醐天皇に楯突いて室町幕府を樹立した足利尊氏は賊臣で悪玉の張本人、従つてそれに支援された北朝も亦悪玉、そんな簡単な図式でしか、この南北朝の抗争は語られなかった。今学校ではどんな教え方をしているのだろうか。

(この項未完)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由 (生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまかせ下さい。)

一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度

一、締切 毎月末日

法 然 上 人 鑽 仰 会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄 土 五十九巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成五年一月二十五日 印刷

平成五年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 (有)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三二六)五九四四

〒二〇(振替)東京八一八二一八七

《全国学校図書館協議会選定図書》

ことわざで読む仏教文化の華！

だれもが知っていることわざからの仏教入門の手引

仏教ことわざ辞典

勝崎 裕彦 著

■読みやすい愛蔵版——定価8000円(税込)

A5判・上製クロス装・函入

本文約300ページ 10ポイント2段組

●挨拶の冒頭、法話の導入部に、文書布教にと、さ

まざまに活用できる座右の書。

●視力の衰えた中高年の方におすすめします。

■ハンディな携帯版——定価2500円(税込)

四六判・上製カバー装

本文約300ページ 9ポイント2段組

●日本の伝統文化を知りたい人々に、また寺院から

檀信徒への施本に最適。

●一家に一冊、常備の書。

発行 溪水社 〒一〇三(三八一四)九六三(一)振東京七三三六六五

発売 北辰堂 〒一〇三(三八一四)九六三(一)振東京九一四三二四二